

主 題：勝利をくださる主

聖書箇所：ヨハネの福音書 20章1-31節

「イエス・キリストは死んだ後、三日後によみがえられた」、これが教会がこの世に誕生してから人々が語り続けたメッセージでした。その当時の人々は、イエス・キリストが十字架で亡くなったことを実際に目撃していました。ですから、彼らはイエスの死を否定することはありませんでした。しかし、その後しばらくしてから、当時恐れていたはずの弟子たちが、勇気をもって大胆に「十字架に架けられたイエス・キリストはその死からよみがえった」というメッセージを語り始めたのです。このことはその当時の人々に大きな動揺をもたらしました。イエス・キリストの復活、実は、そのことはこの聖書が私たちに繰り返し教えている真理です。しかも、この真理は私たち信仰者にとってとても大切な真理であり、私たち信仰者のその信仰の土台ということが出来ます。イエス・キリストが十字架で死んで、もし、そのままでよみがえらなければ、彼は嘘つきであり彼は救い主ではありません。しかし、彼は十字架にかかって死ぬ前からそのことを預言し、そして、その通りに死から敢然とよみがえって来たのです。この復活こそが、私たちにこの方が神であり救い主であるということを明らかにしたのです。ゆえに、私たちはこの主イエス・キリストにあって、永遠の希望をもって今日生きることが出来る者へと生まれ変わったのです。それが私たち信仰者、クリスチャンです。私たちの信仰の土台であるこのイエス・キリストの十字架、そして、復活。この復活という出来事を、私たちは今日ともにお祝いするのですが、今日、私たちは福音書の第4番目の福音書であるヨハネの福音書をごいっしょに見て、特に、このイエス・キリストの復活に関するみことばを学んで行きたいと思えます。どうぞ、ヨハネの福音書20章をお開きください。このヨハネの福音書20章で、ヨハネはイエス・キリストは本当に死から肉体をもってよみがえったということを明らかにしようとしています。彼が伝えたかったことは、イエス・キリストは敢然とその死からよみがえって来たということです。

☆イエス・キリストの復活について

ヨハネは20章の1節から29節まで、イエス・キリストは本当にその死からよみがえったということを教えます。1節から10節で、彼は、まずイエスがよみがえった、なぜなら、人々がイエスの墓を訪れた時に、そこにイエスのからだはなかった、墓は空だったと教えます。そして、11節から29節を見ると、ここでは十字架で死んだイエスが肉体をもって人々の前に現われ、そして、本当にその死から勝利された、死に打ち勝たれた、よみがえったということを明らかにしたのです。イエスの顕現というもの、形をもって実際によみがえったということを明らかにして、イエスはよみがえったということをヨハネは教えようとするのです。

1. 空の墓 1-10節

最初に、墓は空だったこと、そして、イエスは人々の前に現われたこと、ヨハネはこれらをもってイエスが死からよみがえって来たということを明らかにしました。イエスは本当に死からよみがえって来た、その証拠を私たちは今、このヨハネの教えを通して学んで行きたいと思うのです。イエス・キリストが墓に納められたことを見ていた人々はたくさんいました。その中でこのヨハネ20章では二組の人たちが墓を訪れた時、その墓の中は空であったという証言をしています。

1) マグダラのマリヤ 1-2節

1-2節「さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。:2 それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子とのところに来て、言った。「だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。」、一組目、最初のグループはマグダラのマリヤたちでした。この1節を見ると、マグダラのマリヤ一人だけが墓を訪問したように思えます。しかし、2節の終わりを見る「主をどこに置いたのか、私たちにわかりません。」と言っています。つまり、そこにはマグダラのマリヤだけでなく、他にも人がいたのです。そのことに関しては、この出来事の並行箇所である他の福音書を見るとこの意味がよく分かります。マタイの福音書28:1には「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。」とあり、マグダラのマリヤとほかのマリヤがいっしょにいたと教えています。マルコの福音書15:40では「また、遠くのほうから見ていた女たちもいた。その中にマグダラのマリヤと、小ヤコブとヨセの母マリヤと、またサロメもいた。」と、二人のマリヤともう一人サロメもいたと記されています。ルカの福音書24:10を見ると「この女たちは、マグダラのマリヤとヨハンナとヤコブの母マリヤとであった。彼女たちといっしょにいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。」とあり、マグダラのマリヤの他に、ヤコブの母マリヤとヨハンナがいっしょにいたと記されています。ですから、マグダラのマリヤが「主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。」と言ったのはそういうことなのです。

ヨハネは、人がたくさんいた中で、特に、このマグダラのマリヤに焦点を当てて記しているにすぎないのです。

マグダラのマリヤが墓を訪れました。そして、そこで彼女が見たのは空の墓だったのです。そこにイエス・キリストのからだはなかったのです。そこで彼女は急いで「シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子」のところに走っていったと言うのです。この「イエスが愛された、もうひとりの弟子」というのはヨハネ自身のことです。ヨハネは自分のことをこのように記しています。マグダラのマリヤはペテロとヨハネのところに行って「だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにわかりません。」と、このような報告をしたのです。これがイエスの空の墓を見つけた第一番目の人々です。

2) ペテロとヨハネ 3-10節

二組目のグループは、その話を聞いたペテロとヨハネです。それが3節から出て来ます。3-7節「そこでペテロともうひとりの弟子は外に出て来て、墓のほうへ行った。:4 ふたりはいっしょに走ったが、もうひとりの弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。:5 そして、からだをかがめてのぞき込み、亜麻布が置いてあるのを見たが、中にはいらなかった。:6 シモン・ペテロも彼に続いて来て、墓には入り、亜麻布が置いてあって、:7 イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。」この二人の人物、ペテロとヨハネが墓を訪れた時のことがここに書かれています。ヨハネが最初に着いたというのはいろいろな理由があります。多分、彼の方が若かったのかもしれませんが。足が速かったのかもしれませんが。しかし、二人でいっしょに走り出して、ヨハネの方が先に着いたというのです。そして、ヨハネは「からだをかがめてのぞき込み、亜麻布が置いてあるのを見た」のです。でも、ヨハネは墓の「中にはいらなかった。」と教えています。ペテロが後からやって来ました。彼は「墓には入り、亜麻布が置いてあって、:7 イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。」とあります。実は、この5節と7節で同じように「見た」という動詞が使われていますが、二つは意味が違います。5節のヨハネが「見た」というのは、墓の中の様子をただ見たにすぎなかった。でも、7節でペテロが「見た」という行為、これは「関心をもって見る、眺める、観察する、よく注意してみる」という意味です。ですから、ペテロはただ眺めただけでなく、実際に墓の中に入って周りをよく見て観察したのです。その結果、大切なことが分かりました。それは、イエスのからだはなかったこと、そして、そこに亜麻布が置いてあったというヨハネの観察、もちろん、女性たちの観察のそれ以上のことをペテロは発見したのです。確かに、そこには亜麻布と布切れが置かれていましたが、この二つは離れた所に別々に置いてあったと言います。このことは何を意味するのでしょうか？私たちはミイラのようなものを想像する時に、頭の前からつま先まで布でぐるぐる巻きになっている姿を連想します。でも、聖書が教えているこのイエスの埋葬に関してはそれとは違うのです。亜麻布は頭以外の部分を覆い、頭は別の布切れで覆ったのです。ですから当然、頭とからだを巻いた布は別のものでした。この7節でヨハネが言った「離れた所に巻かれたままになっているのを見た。」というのは、頭に巻かれたものとかからだを巻いたものは初めから離れていたのです。離れたままの状態です。そこに残っていたのをペテロは見たと言うのです。

ですから、あたかもそこにイエスが納められたそのままの姿で、からだはなく、その布だけがそこに置いてあったと言うのです。つまり、巻かれた布から中身だけがどこかに行ってしまったのです。非常に驚くべきことです。マグダラのマリヤは言いました。「だれかが墓から主を取って行きました。」と。その後も彼女はそのことを繰り返すのですが、もし、だれかがからだを盗んだと考えてみてください。わざわざ頭の布切れを外して、元あったような状態において、そして、からだを巻いていた亜麻布を取って、元あった状態において、そのからだを盗んで行くのでしょうか？布切れと亜麻布は巻かれたそのままの状態です。しかも、この亜麻布を巻く時には香油等を使います。ですから、女性たちは香油を持って墓にやって来るのです。埋葬を完全にするために彼らはやって来たのです。つまり、そのように香油を使うことによって、それが粘着材のような働きをして亜麻布が剥がれないようにするのです。ですから、少なくとも数日巻かれていたイエスのおからだからそれを剥がそうとするなら、非常に慎重にしなければなりません。盗人にそのような余裕があるのでしょうか？

この頭に巻かれていた布切れ、からだを巻いていた亜麻布、それが巻かれたままの状態です。置かれていたことは、先ほども話したように、ペテロがただ見ただけではなく詳しくその状況を観察したから分かったことです。まさに、からだだけがこの布切れから無くなってしまったのです。ここまで詳しく観察したペテロですが、彼は未だイエス・キリストがよみがえったということを受け入れていません。そのことを未だ理解していなかったのです。ところが、ペテロの後でヨハネが墓の中に入っていきます。8節を見てください。「そのとき、先に墓についたもうひとりの弟子もはいつて来た。そして、見て、信じた。」、ヨハネは初めてペテロといっしょにこの墓の中にはいつて行くのですが、その時に「見て、信じた。」のです。ここで使われている「見て」ということばは「それを知る、理解する」ということばが使われてい

るのです。ですから、ヨハネはここで自分自身で中に入ってその様子を見て「私はあることを理解した」と言うのです。それは「イエス・キリストは死からよみがえったということを私は理解した」ということです。このヨハネは、実際によみがえられた主イエス・キリストにお会いする前に、復活の主にお会いする前に、彼の復活を信じた最初の人です。

先ほども話したように、ペテロはその時未だそのことを理解していませんでした。9－10節「**彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。：10** **それで、弟子たちはまた自分のところに帰って行った。**」と、残念ながら、ペテロはよく理解していなかった、でもヨハネは理解したのです。空の墓、マグダラのマリヤが行った時、そして、ペテロとヨハネが行った時に彼らが見た墓にはイエスのからだがなかったのです。

2. イエス・キリストの顕現 11－29節

このことを記したヨハネは、11節から29節で「顕現」ということ、イエス・キリストが実際に人々の前にご自身のからだをもって、よみがえったことを明らかにされた、そのことが記されています。ですから、ここを見ると、ここにもまた三度イエス・キリストがご自身の復活を明らかにしたということが記されています。最初はマリヤに対してイエスは実際に現われて復活を明らかにされました。二回目は十人の弟子たちが集まっている所に、そして、三回目はトマスを加えた十一人の弟子たちが集まっている所に現われたのです。

1) マリヤに対して 11－18節

まず、このマリヤに現われたイエスのことから見て行きましょう。11－13節「**しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。：12** **すると、ふたりの御使いが、イエスのからだ置かれていた場所に、ひとり頭のところ、ひとり足のところ、白い衣をまとってすわっているのが見えた。：13** **彼らは彼女に言った。「なぜ泣いているのですか。」**彼女は言った。「**だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」**、ここには天使とマリヤのやりとりが記されています。マリヤはイエス・キリストがよみがえったことが未だ分かっていません。だれかが盗んで行ったと彼女は答えるのです。14節「**彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。**」、そして、15節ではイエス・キリストとマリヤの会話が始まるのです。「**イエスは彼女に言われた。『なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。』**彼女はそれを園の管理人だと思って言った。『**あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか言ってください。そうすれば私が引き取ります。**』、このようにイエスと話しているながら彼女は未だ分かっていないのです。マリヤ自身、本当に絶望の中に悲しみの中にいたのでしょう。11節に記されているように「**墓のところにたたずんで泣いていた**」のです。イエスを愛するゆえに、イエスがいなくなってしまうこと、死なれただけでもショックだったのに今度はそのイエス・キリストの遺体がなくなってしまう、大変なショックでした。彼女はイエスを見てもイエスだと分からず、「**園の管理人だと思った**」とあります。彼女はもしかするとこの管理人がイエスのからだを動かしたのかもしれないと思いました。そこで「**あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか言ってください。**」と言います。天使に出会った時も、そして、イエスに出会った時も、このマグダラのマリヤはイエスが死からよみがえったということを信じることはできませんでした。信じていなかったのです。だれかが盗んで行ったと思っていたのです。

そこで16節から、イエス・キリストは今度は彼女に声を掛けられました。彼女の名前を言われたのです。16節「**イエスは彼女に言われた。『マリヤ。』**」と、その時にマリヤは気付くのです。自分の名前を何度も呼んでくださっていた主イエス・キリスト、自分の名前を呼ばれた時に「**彼女は振り向いて、ヘブル語で、『ラボニ（すなわち、先生。）』とイエスに言った。**」のです。やっと分かったのです、この時に。「この方は主だ。イエスさまだ」と分かった時に、彼女の心の中にどのような思いが湧き上がって来たか想像がつかます。「イエスさまだ！」と分かった時に、彼女はイエスにすがりついたのです。当然のことです。いなくなってしまうと思っていた人がそこにいるのですから。自分が最も愛していたその人がそこにいるのですから…。それゆえに彼女はイエスにしがみつくのです。しかし、17節「**イエスは彼女に言われた。『わたしにすがりついてはいけません。』**…」と、多くの人はこのみことばを見て、何だかイエスがとても冷たい人のように思います。マリヤの反応は、当然のこと、自然のことです。愛するその人がそこにいたらその人に抱きついてしまいます。ところが、イエスは「**わたしにすがりついてはいけません。**」と言われます。なぜでしょう。「**わたしはまだ父のもとに上っていないからです。**」と、実は、この出来事の並行箇所であるマタイ28：9を見ると「**すると、イエスが彼女たちに出会って、「おはよう。」と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拝んだ。**」と書かれています。ですから、マリヤはこの時にイエスがそこにいてくださるということを喜んでイエスの御足に抱きついただけでなく、そこでよみがえられた主を見て、この方は神だと確信して崇拝するのです。なぜ、イエスは「**すがりついてはいけません。**」と言われたのでしょうか？その後「**わたしはまだ父のもとに上っていないからです。**」と言われています。イ

イエスが言いたかったことは「マリヤ、わたしはまだしばらくここにいるから、」ということです。マリヤはもうイエスがどこにも行かないことを願いました。十字架でなくなった姿を見て心が引き裂かれそうでした。そして、墓に納めて、しかし、その墓からいなくなってしまう、どこに行ってしまったのだろうと思っていたのに、「ここにイエスさまがいらっしゃる、もうイエスさまどこにも行って欲しくありません。私はあなたの側にいたいのです。」と、だから、すがりついたのです。そのマリヤに対して「マリヤ、すがりつかなくていい、まだしばらくわたしはここにいる。必ず、後には天に上がるけれど、しばらくはまだここにいる。」と言われたのです。その後、約40日間イエスはこの地上におられました。

しかも同時に、イエス・キリストが、このマリヤに、また人々に教えようとしたことは、実は、イエスがこの地上にいてくださって、その御側にいることよりももっとすばらしい知らせがあなたがたに与えられるということを教えるのです。17節を見てください。「父のもとに上がっていないからです。」と言った後、「わたしの兄弟たちのところに行って、」と、ここです。イエスはここで、イエス・キリストを信じている弟子たちのことを「わたしの兄弟」と、そのように呼ばれました。つまり、特別な関係をもった者たちです。ヨハネ1:12では「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」とあります。また、15:15ではイエスは私たちクリスチャンのことを「友」と呼んでくださるとあります。「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」。そして、ここでは私たちクリスチャンのことを神は「わたしの兄弟たち」と呼んでいます。神との特別な関係を得たのです。ですから、その後、「彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」と書いてあります。「わたしの父またあなたがたの父」、「わたしの神またあなたがたの神。」と。「わたしの」と平仮名で書いてあるのはイエスご自身が言われているからです。「わたしの父」、わたしの個人的な父なる神のことです。その父は「あなたがたの父」であると複数になっています。

つまり、イエスが言われたことは、イエス・キリストを信じて罪赦された人は、神と特別な関係に入るということです。そして、「わたしはあなたがたのことを『わたしの兄弟』という。」と言われるのです。ただし、違うところもある、わたしと父なる神との関係と、あなたがたクリスチャンと父なる神の関係は同じではないと言います。昔、このような質問を受けたことがあります。「もし、あなたがイエスがこの地上におられた時代に生きることと、今の時代に生きることのどちらでも選べるとするなら、どちらの時代に生きたいですか？」と。皆さんならどうお答えになりますか？私たちの結論は、イエスがにおられた時にそこに生きることが出来たらそれは確かにすばらしい、イエスのお声を聞くことができ、イエスのお姿を見ることが出来る、でも、実は、今私たちが生かされているこの時代はもっとすばらしいのです。なぜでしょう？イエスの時代なら、イエスはどこかに行ってしまう可能性があります。エルサレムにおられたり、ガリラヤに行かれたりと、ずっと追っかけみたいに付いて行く訳にはゆきません。でも今、イエス・キリストが十字架で亡くなって、そして、三日後に死からよみがえって、昇天された後、主はクリスチャンにある約束を与えました。もうしばらくすると、もう一人の助け主をあなたたちに与えるという約束です。聖霊なる神が与えられるという約束です。その聖霊なる神はあなたのうちに住んでくださるのです。ということは、私たちはその神を追っかける必要がないのです。その方がいつもともにいてくださるからです。

ヨハネはそのことを教えてくれているのです。新しい関係、新しい祝福、すばらしい祝福がイエス・キリストを信じる者たちに与えられること、イエスが昇天した後、父のもとに上った後、信じる者たちにすばらしい祝福が与えられると言うのです。イエスはマリヤに「わたしにすがりついてはいけません。」、わたしはまだしばらくここにいるから、実は、あなたには大切な務めがあると言ったのです。17節の最後に「…と告げなさい。」と書かれています。そして、18節に「マгдаラのマリヤは、行って、『私は主にお目にかかりました。』と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたと弟子たちに告げた。」とあります。お気付きになりましたか？マгдаラのマリヤは愛するイエスにお会いして喜んでいました。イエスといっしょにいたいと思ったのです。でも、その主から言われたことは「マリヤ、わたしはあなたに命令する。出て行って、弟子たちにあなたが経験したことを話さない。」ということでした。マリヤは即座に出て行って、そのことを人々に語るのです。実は、これが神から豊かな祝福をいただいたことが分かった人の神に対する正しい応答です。神に心から感謝している人はその感謝をどのように神に現わすのでしょうか？主が命じられることに対して即座に応答して行くのです。マリヤは躊躇していません。弁解もしていません。主がこのようにしなさいと言われたら、喜んでそのことを即座に行なったのです。それが祝福をいただいた者が為すことができる感謝の証です。

2) 10人の弟子たちに対して 19-23節

マリヤに現われたイエスは、次に10人の弟子たちに現われた様子が19-23節にあります。19節「その日、すなわち週の初めの日の夕方のであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめて

あったが、なぜ、彼らは自分たちが集まっていた所の扉を固く閉じていたのでしょうか？ユダヤ人を恐れていたのです。イエスを迫害したユダヤ人たちを恐れていたのです。自分たちにも同じような迫害が及ぶのではないかと思ったからです。それゆえ、彼らはひっそりと鳴りを潜めて家の中にいたのです。なぜなら、彼らはイエス・キリストの十字架を目撃したのです。むごたらしく苦しめられて処刑させられていったイエスの姿を見たから、当然、彼らは恐れます。自分たちの身にもそのようなことが起こるのではないかと。ところが、19節には続いて「**イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。『平安があなたがたにあるように。』**」と記されています。「平安があなたがたにあるように。」とは代表的な挨拶です。しかし、感謝なことです。弟子たちは非常に恐れていたのです。動揺していたのです。その弟子たちに主が言われたことは「**平安があなたがたにあるように。**」でした。いろいろなことがあっても本当の平安をいただくとするなら行くべき所はただ一つ、私たちに本当の平安を与えてくださる神の所です。主イエス・キリストは私たちにこのような平安を約束してくださいました。「**わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。…世が与えるものと違います。**」(ヨハネ14:27)と。

20節には「**こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。**」とあります。イエスのご自分の「**その手とわき腹を**」を弟子たちに見せたのです。そこには釘の跡がありました。十字架で磔にされたときの釘の跡です。わき腹も見せました。これはローマ兵が死んだかどうかを確かめるためにわき腹を槍で突き刺したのですが、水と血が別々に出て来ました。彼は死んでいたのです。そのわき腹の跡を見せたのです。そうすると、それまで恐れていた「**弟子たちは、主を見て喜んだ。**」と書かれています。彼らは喜んだのです。そして、その弟子たちに対して、21節「**イエスはもう一度、彼らに言われた。『平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなた方を遣わします。』**」と、喜んでる彼らに「わたしはこのすばらしい祝福を喜んでるあなたがたに大切な務めを与えます。わたしが父から遣わされて来たように、今度はわたしがあなたがたを遣わす。」と言われたのです。弟子たちは何のために遣わされるのでしょうか？イエス・キリストがこの世に遣わされて、この世で為されたその働きを継続するためです。父なる神が主イエス・キリストをこの世に遣わされた、そして、イエス・キリストが為さった働きを、今度はイエスが遣わす人たちが継続して行くのです。

◎イエス・キリストが為さった働きとは？

イエスはどのような働きを為さったのでしょうか？

a) 本当の神がどのようなお方を明らかにされた

ヨハネ1:18「**いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。**」、だれも神を見たことはありません。そこで神とはどのようなお方か？本当の神とはどのようなお方を明らかにされたのです。ですから、イエス・キリストを見ると、唯一、真の神がどのようなお方かということ私たちが知ることができるのです。

b) 人々の罪を明らかにされた

ヨハネ3:19-20に「**そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。:20 悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。**」、イエス・キリストは人々にその罪を明らかにしました。人間はみな罪人だということを明らかにしたのです。人間の罪深さを明らかにしたのです。人間は神よりも罪を愛すると言うのです。私たちは創造主なる神を信じたくありません。自分の人生だからと言って好きに生きて楽しみたいと思っています。自分が生きたいというその生き様を邪魔するのは創造主なのです。なぜなら、私たちが神に造られたということに気付くなら、その造られた方に対して私たちは責任が生じるからです。創造主に対してどのように生きるかという責任です。それは私たちにとって厄介なことなのです。だから、自分たちの好きに生きて行きたい、しかし、その好きに生きる人生にいろいろな助けが必要だからとして、自分たちに都合のよい神々を造り始めるのです。そのようにして私たちは創造主がおられることを知っていながら、その創造主を信じようとしないのです。聖書が教えているように「**光が世に来ているのに、**」、神がこの世に人となって来てくれているのに、人々はこの神を愛するよりも「**やみを愛した。**」、罪を愛したと言うのです。「**その行ないが悪かったからである。**」と、悪いことをする者は光を、すなわち、神を憎みます。そして、決して「**光のほうに来ない。**」、神の方に来ようとはしないと云います。人間がいかに神を憎んでいるかということ明らかにしたのです。多くの皆さんは「私は信心深い」と言われるかもしれませんが、しかし、私たち日本人は確かにその行為は熱心かもしれませんが、でも、だれに手を合わせ、だれを崇拝しているのかと問われると、私たちの考えていること信じていることが曖昧になって行きます。なぜなら、よく分からないからです。では、私が手を合わせて拝んで来たものは創造主なる神か？と言われたらどうでしょうか？多くの皆さんはこのように言われるでしょう。「そんな難しいことは私には分かりません。これまでして来たことで十分です。私だけでなく先祖もして来たことをただ同じように繰り返すだけです」と。そうして私たちは何が真理であるかを考えようと思わないのです。

皆さん、人間はそのようにして創造主を信じようとしなさい、それが罪だと言うのです。あなたを造ってくださった神を信じていないこと、愛していないこと、それが罪だと言うのです。イエス・キリストはその罪を明らかにされたのです。

c) 永遠があることを明らかにされた

同時に、イエス・キリストは永遠について教えられました。人間は死んで終わらない、死んだ後必ずよみがえる、そして、その後、永遠を過ごすということを明らかにされたのです。このヨハネ5：28-29でこのように言っています。「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。：29 善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」、人はみなよみがえるのです。ある人はよみがえって永遠のいのち、天国に至るけれども、ある人はよみがえってさばきを受ける、永遠のさばき、地獄に行くと言います。では、だれが地獄に行き、だれが天国に行くのでしょうか？善を行った者は天国へ悪を行った者は地獄です。神の前に正しいことを行なった者、すなわち、神を信じないで逆らって来たけれど、神を信じるといふ正しいことを行なうことによって罪が赦された人です。その人は死んでも永遠を神とともに過ごすことができるのです。天国に行くのです。でも、罪赦されていない人はその罪のさばきを受けなければなりません。永遠のさばきである地獄へと至るのです。ですから、イエスは人が死んだ後どうなるのか、永遠について教えておられるのです。

d) 救いの道を明らかにされた

もう一つ、イエスは人々に救いを教えられました。ヨハネ3：3にニコデモとの会話でこのように言われたことが記されています。「イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」、人間、罪人は生まれ変わらなければ天国に入ることにはできないと、生まれ変わることの必要性をお教えになったのです。また、同じ3：16では、皆さんがよくご存じのように「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」とあり、イエス・キリストを信じる者が罪赦されて永遠のいのちを持つことができるのです。

ですから、このようにいくつかのみことばを上げても、イエスは本当の神がどのようなお方かを明らかにし、人間の罪を明らかにされました。また、永遠を明らかにしました。罪のさばきがあること、永遠のいのちがあることを明らかにしました。そして、罪人はどのようにすれば救われて永遠のいのちに至るのかと、これらのことを話されたのです。この主によって遣わされる私たちも、この大切な知らせを人々に伝えて行くのです。本当の神はどのようなお方なのか、人は罪を持った者であること、そして、罪には永遠のさばきがあること、しかし、その罪には赦し、救いがあることを私たちは人々に語って行くのです。

ヨハネ20：23を見てください。面白いことが書かれています。23節「あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」、ここを読むと、あたかも私たちが人の罪を赦したり、認めなかったりと、私たちにそのような主導権があるように思ってしまう。でも、この箇所はそのようなことを教えていません。この箇所が教えていることは、私たちが人の罪を赦したり、「あなたは赦されていません」と宣言することなど出来ないこと、すなわち、神の救いのみわざを宣告しているのです。なぜ、そのように言い切れるのでしょうか？実は、「あなたがたがだれかの罪を赦すなら、」と言って、その次「その人の罪は赦され、」、そして、「あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、」、「それはそのまま残ります。」と言っていることです。「罪は赦され、」と「残ります。」のこの二つの動詞の時制を見るとき、面白いことに気付くのです。この二つとも同じ時制が使われています。もうすでに起こったこと、すなわち、「完了形の受け身」です。ということは、何を言っているのでしょうか？その人の罪が赦されるということは「受け身」なのです。つまり、そのことは神によってなされるみわざなのです。しかも、完了形ということは、もうすでに神が成されたことだと言ったのです。神がその人の罪をすでに赦された、では、その人に対して私たちは何が出来るでしょうか？その人の「罪は赦された」と宣告することです。なぜなら、神がもうすでにその人の罪を赦されたからです。そして、もし神がその人の罪をまだ赦していなければ、私たちがすることは「赦されていない」と宣告することです。

ですから、私たちは「神が為さったみわざを人々の前で明らかにする」こと、その働きを負っていると言っているのです。救いを為すのは神です。ですから、私たちが出来ることは、神のその救いのメッセージを人々に伝えることです。そして、その救いのメッセージを信じた者たち、神が本当に彼らを救われたときに、私たちは「神が彼を救われた」と宣告し、その人が神の救いを拒んでいるために神がその人を救っていないなら、私たちは「その人は救われていない。」とそのように宣告するのです。私たちに人を救ったり救わなかったりするような権限はありません。神が為さったことを私たちは明らかにするのだと、そのことをヨハネはここで言っているのです。これはまさに、イエスの福音を語るように命じ

られた主の命令の実践です。つまり、先ほどからお話しているように、私たちは「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」とマルコ16:15でイエスが命じられたことを実践することです。

すべての人にイエスの救いを語って行きなさい、そして、そのメッセージを彼らが心から受け入れたら、その人の生活の変化はいろいろなところで明らかになります。そして、彼らが本当に受け入れたなら、私たちは「あなたは救われている。」とすることができるし、救いのメッセージを語っても人々が信じなければ、「残念ながらあなたはまだ救われていない。」と宣告することができるのです。私たちはそのようにしています。イエスのメッセージ、福音を語って、そのことを信じた人は「あなたは神の救いにあずかった。良かったですね。」と言います。救いのメッセージを語っても信じないなら、私たちはこのように言わなければなりません。「悲しいけれど、あなたはまだ神を受け入れていません。」と。クリスチャンの皆さん、私たちは人を救うことはできませんが、感謝なことに、神の救いのメッセージを語ることが神から託されています。それが私たちの責任です。もちろん、私たちはすべての人が救われて欲しいと願っています。でも、現実はなかなかそのようにはなりません。しかし、失望してはならないのです。なぜなら、神が託された私たちの責任は「出て行って、このすばらしい神の救いを伝えること」です。それが私たちの責任だからです。

この命令を与える主が弟子たちに何をしたのでしょう？ヨハネ20章をもう一度見てください。22節「そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』」。ここでイエスが為さったことをヨハネは告げるのです。この「息を吹きかけて」ということばは、実は、創世記2:7の70人訳で使われていることばと同じものが使われているのです。創世記2:7「その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」、神が土から人間を造り、そこに息を吹き込んだこと、「その鼻にいのちの息を吹き込まれた」、そして、「人は、生きるものになった。」とあります。それと同じことばがヨハネ20:22で使われているのです。土で造った人間に息を吹き込むことによって、生きもの、生きるものとなったのです。それで神はここで弟子たちに息を吹き込まれたのです。それによって彼らは生きるものになったのではありません。彼らはもう生きています。彼らはより霊的な者になったということです。イエスは弟子たちに「聖霊を受けなさい。」と言われました。なぜなら、この聖霊が私たちの信仰の歩みに大きな助け、力を与えてくれるからです。私たちはどのような働きをする時でも、聖霊なる神の助けをいただきながら働きを為して行くことが必要です。だから、主はこのようにことを為さったのです。「わたしがあなたがたを遣わす」と言われた時に、彼らに息を吹きかけて、彼らがしっかりと立って、そして、神に助けられながらこの大切な務めを果たして行くようにと、主はこのようにことを為さったのです。

それなら、今の私たちも同じことです。あなたは神によって遣わされています。このすばらしい救いの主を伝えるためにあなたは遣わされているのです。もちろん、その働きを皆さんは一生懸命為しておられると思います。でも、もし疲れておられるなら少し考えてみてください。「私はこの大切な働きを自分の知恵や力で為そうとしているのではないか？それとも、神の助けをいただきながら為しているだろうか？みことばを語る事ができたことを感謝しているか？人が救われないと失望していないか？」と。私たちに託された働きは「わたしがあなたを遣わすから、出て行って、わたしが告げよというメッセージを語りなさい。」と言われたことを実践することです。

3. トマスを加えた11人の弟子たちに対して 24-28節

三番目に、24-28節に、最後に11人、先ほどはいなかったトマスを入れた11人にイエス・キリストは現われました。24-25節「十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。:25 それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た。」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。」、これは日曜日の夕方のことです。その時にトマスはいなかったのです。そこで他の弟子たちが彼に「実は、私たちはイエスさまにお会いした。イエスさまは本当によみがえられたのだ。」と話しても、トマスはそれを信じる事ができなかったのです。そこで、トマスは「証拠がなければ、」と言うのです。私たちも同じです。「私はその手に釘の跡を実際に見て、そこに自分の指を差し入れてみて本当に確認しなければ」、また、「そのわき腹の槍の跡に自分の手を差し入れてみなければ私は信じない。」と言うのです。26-29節を見てください。「八日後に」、次の日曜日のことです。「八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように。」と言われた。:27 それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」:28 トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」

イエスはここで、トマスのその不信の心、神が言われたことを信じないで疑う心を責めています。こ

の一連の出来事を通して、トマスは主イエス・キリストを「私の主。私の神。」と告白して彼を崇拝するのです。これはユダヤ人にとっては非常に大きな決心です。なぜなら、彼らは「神はひとりである」と信じているからです。そして、トマスは今ここで、その真の神こそがこのイエス・キリストであるという告白をしたのです。なぜ、このような決心に至ったのでしょうか？二つの理由が考えられます。一つは、イエスがトマスのところに現われたとき、イエスがトマスに言われたことは先にトマスが言ったことそのものでした。「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」とトマスが言ったときイエスはそこにいなかったのです。二つ目に、イエスがトマスの前に現われた時、イエスはトマスに「そのようにしなさい。」と言われたことです。それを聞いて、トマスは驚いたでしょう、なぜ、この方は私の言ったことを知っているのだろうか…。そして、実際に手の釘の跡に指をつけ、槍に刺されたわき腹に手を差し入れることによって、この方は確かに、からだをもって、肉体をもってよみがえられたという、その確信を得たのです。この方はすべてのことをご存じの全知の神である、この方は確かに言われた通り、その死から三日後によみがえって来られた真の神であると告白し、トマスはこの方を神として崇拝するのです。

私たちはこれまで、イエス・キリストがマリヤに、10人の弟子たちに、そして、11人の弟子たちに現われたその様子を見て来ました。彼らはみな、イエス・キリストに出会うことによって確信を持ちました。確かに、イエスは真の神だという確信です。

そして、最後の30-31節を見た時、この復活がもたらすことを記しています。30節「この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行なわれた。」、ここには書かれていないけれど、イエスはまだいろいろな奇蹟を行なったと言っているのです。そして、何のためにこのヨハネの福音書が記されたのか？31節「しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」、それはあなたがたがイエスを信じて永遠のいのちを得るためであると言います。主イエス・キリストは、自らの罪を悔い改めて、イエスを自らの救い主として、また、主として信じ受け入れる者に罪の完全な赦しと、永遠のいのちを与えることができる唯一のお方です。なぜでしょう？イエスの働きを見てください。いろいろな奇蹟を行なわれました。しかも、人間の罪を赦すと言われました。これは神にしかできないことです。この働きこそ彼が真の神であることを明らかにするのです。イエス・キリストのこの地上における歩みを見てください。約33年の間、彼のうちには罪がなかった、だれもそれを見つけないことはできませんでした。彼だけが罪のない神の前に正しい生き方をしたのです。なぜなら、彼こそが人となって来られた神だからです。そして、主イエス・キリストのおことばを聞くと、彼のことばにはうそ偽りがなかったのです。言われたことをその通りに実行なさったのです。イエス・キリストは「わたしはあなたのために十字架で死にます。」と言われ、その通り、自ら進んで十字架で死なれました。何のためにでしょう？あなたの罪を赦すためにです。イエスは「死んだ後、必ず三日後によみがえる。」と言われました。そして、その通りに死からよみがえって来られました。このすべてのことが証明することは何でしょう？「イエスは真の神だ」ということです。「あなたを救う」と言われたなら、必ず救ってくださる方、「あなたの罪を赦す」と言われたなら、必ず赦してくださるお方です。だから、主イエスは神であり、主イエスは救い主なのです。私たち人間にも、死に対しても、罪に対しても勝利をもたらしてくださる唯一のお方です。なぜなら、彼自身が死に勝利したからです。彼自身があなたのすべての罪を赦し、罪からの勝利をあなたに与えてくださるからです。

神が言われたことを「そんなことは信じることなど出来ない」とあなたは言われるのでしょうか？不信仰の歩みをしておられませんか？クリスチャンの皆さん、神が言われたことをその通り信じていますか？「神が言われたから私は信じる。」、それがあなたの信仰の歩みですか？まだイエス・キリストを信じておられない皆さん、あなたはいつまで神に背を向けて逆らい続けるのですか？29節でイエスはトマスにこのように言われました。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」と、そして、その主は27節でこのように言われました。「信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」と。

クリスチャンの皆さん、私たちの主は十字架で死んだ後、その死から敢然とよみがえって今も生きておられる神です。この方は言われたことを必ず実行なさいます。私たちがこのすばらしい主を信じるのが出来た者として、すばらしい永遠の祝福が約束されている者として感謝を現わす方法は、「主よ、私はあなたの言われたことを信じます。あなたの約束を信じます。」と主に信頼を置いて生きることです。「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」ことです。

イエス・キリストを信じておられない皆さん、どうぞ、主を拒み続ける生き方を止めて、主を信じない者にならないで、主を信じる者になって、このすばらしい祝福を今日ご自分のものにしていただきたいと心からお勧めします。